



長戸呂遺跡
第4トレンチ
土坑検出状況（西から）



長戸呂遺跡
第6トレンチ
遺物出土状況（西から）



長戸呂遺跡
第1トレンチ
土坑検出状況（西から）

②新屋敷遺跡

1 遺跡所在地	雄勝郡雄勝町桑ヶ崎字新屋敷146外
2 確認調査期間	平成14年10月7日～10月21日
3 確認調査対象面積	15,000㎡
4 工事区域内遺跡面積	9,200㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

新屋敷遺跡は雄勝町役場の北東約3.5km、出羽丘陵と奥羽山脈の間を北流する雄物川の右岸から約1.6kmの扇状地上に立地する。小比内山地の麓にある平城集落から北西約400m、桑ヶ崎地区の水田地帯北側に位置し、北方600mには高松川が西流する。遺跡の標高は126～128mである。本遺跡とその周囲は、秋田県編『土地分類基本調査 湯沢』（1980年）によると、地形区分上は雄物川低地に属し、高松川低地に隣接する。表層地質は第四紀沖積世の未固結堆積物（沖積低地堆積物）である。土壤統は細粒質のグライ土壌であることから浅津統に属する。扇状地であるため、奥羽山脈の西端裾部から雄物川右岸に向かって、寺田川や御返事川などの小河川が各所に流れているが、調査区に最も近いのは北を流れる高松川である。

本遺跡の南東約200mの地点（雄勝町桑ヶ崎字平城）には、昭和54年に発掘調査された戦国期を中心とする中世平城跡および江戸時代初頭～中期の集落跡である鶴沼城跡が近接する。鶴沼城跡では、少量ではあるが縄文時代後期の土器片および石器が出土しており、これら縄文時代の遺物は今回の新屋敷遺跡確認調査で出土した遺物と一部時期が合致する。

b 現況

過去、調査対象区は水田であった。現況はすでに湯沢横手道路工事路線内にあり、周囲では造成や転圧などの工事が着工中である。調査対象区の西側を工事用進入路（砂利道）が南北方向に縦走している。路線幅杭の東西両側は水田であり、農業用水路および古い畦畔が調査区を囲んでいる。工事用中心杭No.127付近には工事路線を南北に分断する県道（幅4.5mの舗装道）が走り、これが調査区の北端を成す。

6 確認調査の方法

工事用中心杭No.111南側からNo.127北側までの南北長約330m、東西幅約60mを調査対象区とした。旧水田面の畦畔等の地形を考慮して、幅2m×長さは任意のトレンチを24本設定した。このトレンチを重機によって掘り上げたのち、遺構確認面もしくは地山面まで人力で精査し、遺構・遺物の有無を確認した。また、調査区内西側を南北方向へ縦走する工事用進入路（砂利道）があるため、トレンチを設定できない調査区南西端の部分は2m×3mの坪掘りを3箇所設定して人力で精査を行った。なお、確認調査対象面積15,000㎡のうち、試掘面積は1,606㎡で、対象面積試掘率は10.7%である。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下のとおりに分層した。

第Ⅰ層：黒褐色土（10YR 2/3） しまり中・粘性中、表土兼耕作土。層厚10～25cm。

第Ⅱ層：黒褐色土（10YR 2/2） しまり弱・粘性弱、遺物包含層・遺構確認面。層厚10～20cm。

第三層：黒色土 (10YR 2/1) しまり中・粘性中、遺物包含層・漸移層。層厚10～20cm。

第四層：黄褐色土 (10YR 4/3) しまり無・粘性弱、礫多数含む・地山

なお、ここでは第Ⅰ層下～第Ⅱ層の黒褐色土が遺構確認面であることから、発掘調査にて表土除去を重機で行う場合、黒褐色土よりも上面で掘り下げを停止する必要がある。

b 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑48基、柱穴様ピット75基の計124遺構である。調査対象区内における遺構の分布状況は、調査区を工事用中心杭No.122～123間の畦畔以北（調査区北側と略称）と同畦畔から工事用中心杭No.117の農道まで（調査区中央と略称）、および同No.117の農道以南（調査区南側と略称）の地形に準じた3地区でとらえると、調査区中央の密度が最も高い。ここでは8～11・14トレンチを中心に竪穴住居跡、土坑、柱穴様ピットを検出した。次に密度が高いのは調査区南側であり、土坑、柱穴様ピットを検出した。特に多くの柱穴様ピットは、その配置によっては掘立柱建物跡になると考えられる。調査区の至近距離に鶴沼城跡が存在することから、中世の掘立柱建物跡や土坑となる可能性がある。上記の2地区に比べ、調査区北側では遺構が全く検出されなかった。

出土した遺物は、ほとんどが縄文土器および石器であるが、調査区南部の20トレンチから出土したものが多く、逆に多数の遺構を検出した調査区中央では、10・14トレンチ交差から縄文土器が出土したのみで遺物量としては少ない。なお、縄文土器は、後期後半から晩期に比定される時期のものである。調査区北側では遺物の出土は見られなかった。

8 所見

a 遺跡の種類

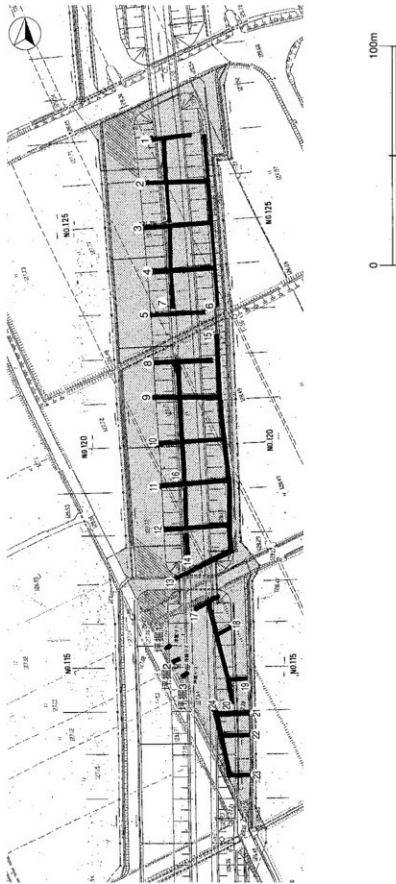
縄文時代後期～晩期の集落跡および遺物散布地であり、中世の集落跡と重なる複合遺跡であると考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

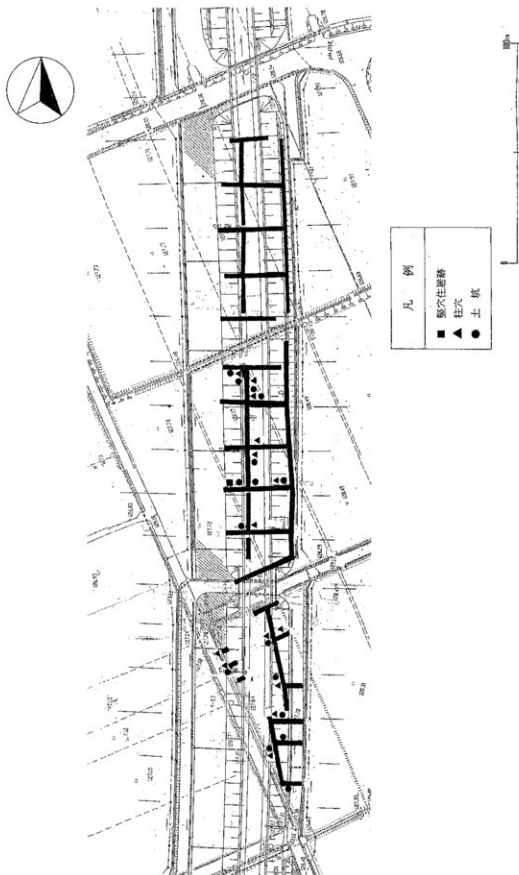
工事区域にかかる遺跡の範囲は、確認調査対象区15,000㎡のうち、遺構および遺物が全く確認されなかった調査区北側の5,800㎡を除いた9,200㎡である。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

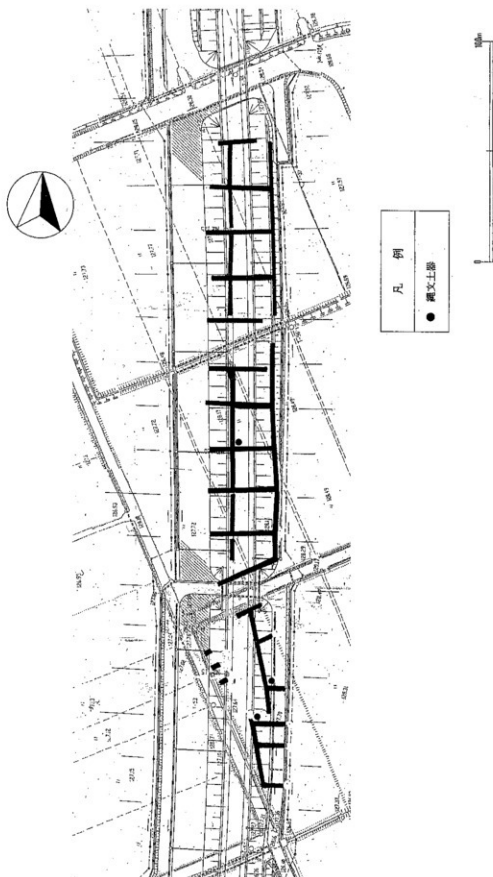
遺構は中世の竪穴住居跡、土坑、多数の柱穴様ピット（掘立柱建物跡）や縄文時代の土坑、柱穴様ピットが検出され、遺物は縄文時代後期から晩期の土器および石器が出土するものと予想される。また、近接する鶴沼城跡で出土した平安時代初頭の土師器や須恵器、中世後半を主体とする陶磁器が出土することも予想される。



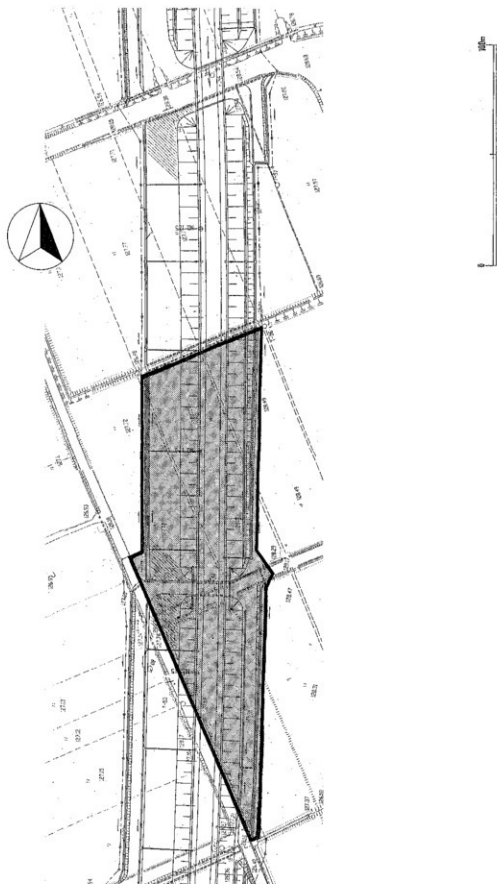
第130図 新屋敷遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第131図 新屋敷踏跡確認調査結果図（遺構検出地点）



第132図 新屋敷遺跡確認調査結果図（遺物出土地点）



第133図 新屋敷道跡範圍図

新屋敷遺跡
第8トレンチ
土坑検出状況 (東から)



新屋敷遺跡
第10トレンチ
土坑検出状況
(南東から)



新屋敷遺跡
第20トレンチ
縄文土器出土地点
(南から)



第3章 調査の記録

③清水前遺跡

1 遺跡所在地	雄勝郡雄勝町桑ヶ崎字清水前226外
2 確認調査期間	平成14年10月16日～10月22日
3 確認調査対象面積	5,700㎡
4 工事区域内遺跡面積	0㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

清水前遺跡は雄勝町役場の北東約2km、出羽丘陵と奥羽山脈の間を北流する雄物川の右岸から約1.5kmの扇状地上に立地する。小比内山地の麓にある御返事集落から西に約200m、桑ヶ崎地区の水田地帯南側に位置し、調査区北端は町道であり、御返事川が西流する。遺跡の標高は133～135mである。

b 現況

過去、調査対象区は水田であった。現況はすでに湯沢横手道路工事路線内にあり、周囲では造成や転圧などの工事が着工中である。路線幅杭の東西両側は水田であり農業用水路が調査区を囲んでいる。

6 確認調査の方法

工事用中心杭No.46からNo.52までの南北長約110m、東西幅約60mを調査対象区とした。旧水田面の畦畔等の地形を考慮して、幅2m×長さは任意のトレンチを8本設定した。このトレンチを重機によって掘り上げたのち、遺構確認面もしくは地山面まで人力で精査し、遺構・遺物の有無を確認した。なお、確認調査対象面積5,700㎡のうち、試掘面積は617㎡で、対象面積試掘率は10.8%である。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下のとおりに分層した。

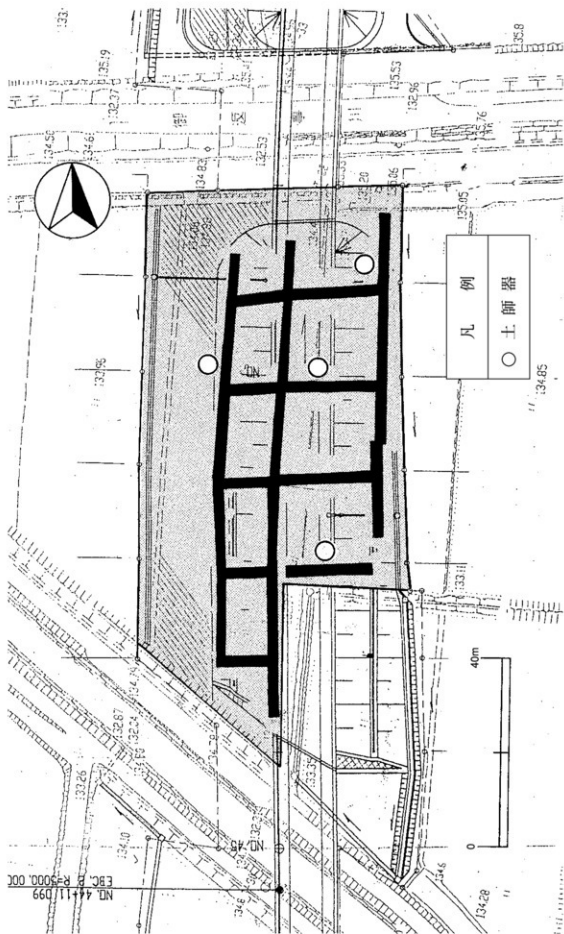
- 第Ⅰ層：黒褐色土 (10YR 2/3) しまり中・粘性中、表土兼耕作土。層厚15～30cm。
- 第Ⅱ層：黒色土 (10YR 2/1) しまり弱・粘性弱、攪乱多数・遺物包含層。層厚10～20cm。
- 第Ⅲ層：暗褐色土 (10YR 3/3) しまり中・粘性中、漸移層。層厚10～15cm。
- 第Ⅳ層：黄褐色土 (10YR 4/3) しまり無・粘性弱、地山

b 検出遺構と出土遺物

遺構は全く検出されず、出土した遺物も土師器片4点のみであった。確認のため、各トレンチの要所には深掘りを入れたが、土層観察の結果、第Ⅱ層が数少ない出土遺物の包含層であり、土層は著しい攪乱を受けており、遺構はこれら後世の耕作や地形改変によって失われたものと考えられる。なお、出土した土師器は平安時代中期に比定される時期のものである。

8 所見

遺構の検出がなく、遺物の出土も著しく希薄なため、工事区域内での発掘調査の必要性はないものと判断した。



第134図 清水前遺跡確認調査範囲とトレンチ位置・調査結果図

(7) 国道13号神宮寺バイパス建設事業

①^{やくし}薬師遺跡

1 遺跡所在地	仙北郡神岡町神宮寺字薬師26外
2 確認調査期間	平成14年10月25日～11月13日
3 確認調査対象面積	4,800m ²
4 工事区域内遺跡面積	7,500m ²
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

薬師遺跡は、JR神宮寺駅から北東へ約700mの地点に所在する。神岡町の地形は、雄物川の氾濫により形成された中央低台地、金葛丘陵、雄物川左岸に位置する姫神山地に大別されており、薬師遺跡の所在する地区は、地形区分上中央低台地に該当する。遺跡のすぐ南側には、雄物川の旧河道と思われる緩やかなくぼみがあり、それより一段高い遺跡がある面は低位の河岸段丘と考えられる。調査では、遺跡の表土下約3mで段丘礫層を確認できた。

b 現況

調査区西側に道路工事用の砂利が敷かれ、調査区全体に盛土が盛られて填圧されている。

6 確認調査の方法

確認調査対象地区に幅2m・長さ任意のトレンチを南北方向に9本、東西方向に17本の計26本設定し、重機で工所用盛土と耕作土（表土）を除去した後、遺構と遺物の有無を確認しながら8層まで掘り下げた。遺構を確認したトレンチでは人力で精査を行い、写真撮影・記録図化作業を行った。確認した遺構等は、縮尺100分の1で実測して記録した。

トレンチの総延長は245m、試掘面積は490m²で、確認調査対象面積の約10.2%である。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下の通りに分層した。

- 第Ⅰ層 道路工事盛土：層厚30～40cm
- 第Ⅱ層 黒褐色土（10YR 3/2）：耕作土。層厚20～50cm。
- 第ⅢA層 ぶい黄褐色土（10YR 4/3）：遺物包含層。層厚5～10cm。
- 第ⅢB層 ぶい黄褐色土（10YR 6/3・10YR 6/4）：遺構確認面。層厚4～15cm。
- 第Ⅳ層 暗褐色土（10YR 3/3）：遺物包含層。層厚7～20cm。
- 第Ⅴ層 ぶい黄褐色土（10YR 4/3）浅黄色（2.5Y 7/4）：遺構確認面。層厚5～20cm。
- 第ⅥA層 褐色（7.5YR 4/3）：遺物包含層。層厚4～10cm。
- 第ⅥB層 黒褐色（7.5YR 3/2）極暗褐色（7.5YR 2/3）：遺構確認面。層厚20～54cm。
- 第Ⅶ層 極暗褐色（7.5YR 2/3）黒褐色（7.5YR 2/2）：遺構確認面。層厚22～34cm。
- 第Ⅷ層 ぶい黄褐色土（10YR 6/4）：遺構確認面。

b 検出遺構と出土遺物

調査区全体を合わせて確認できた遺構は、土坑2基、溝跡4条、柱穴79基である。これらについて部分的に断ち割り調査を行った結果、5トレンチの溝跡内から須恵器を1点検出した。これが唯一遺構内からの出土遺物である。

遺物は、縄文時代後期の土器が16トレンチのⅣ層下部から比較的まとまって出土した。それ以外は、1・4・9トレンチから縄文時代晩期の土器を検出した。4トレンチではⅣ層とⅥA層から遺物が出土している。

8 所見**a 遺跡の種類**

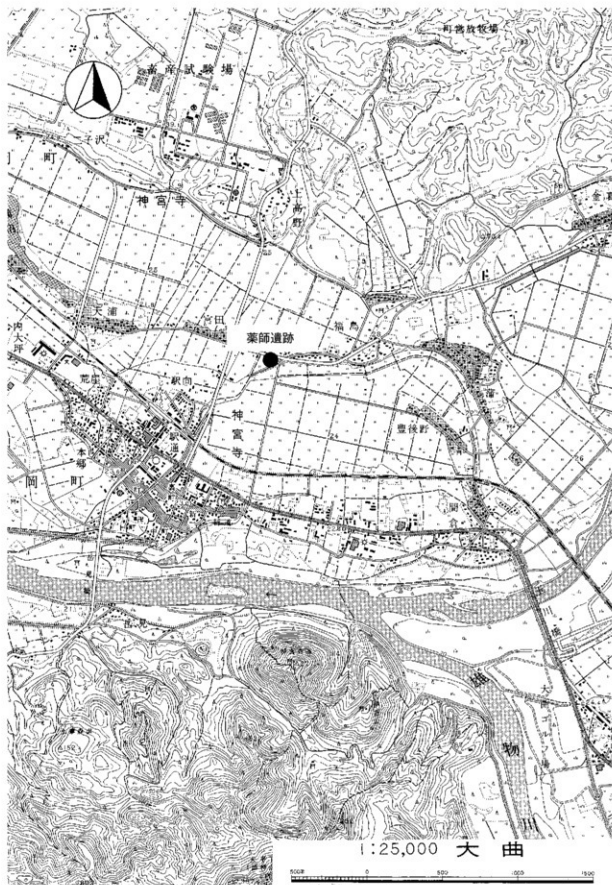
縄文時代、平安時代の複合遺跡であるが、遺構・遺物が希薄であるため集落の末端部と思われる。

b 遺跡の範囲と工事区域

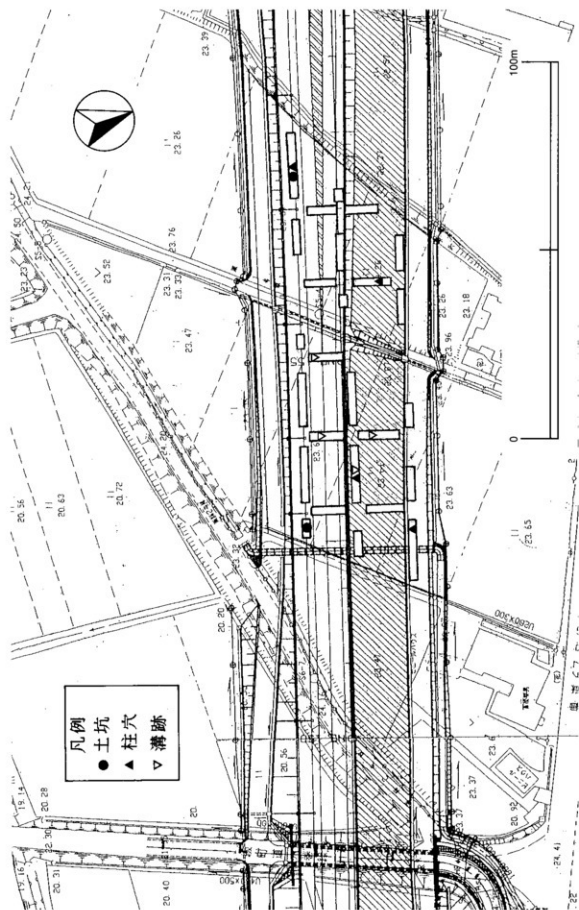
遺跡の範囲は、未買取地を含めて7,500㎡である。

c 発掘調査時に予想される遺構と遺物

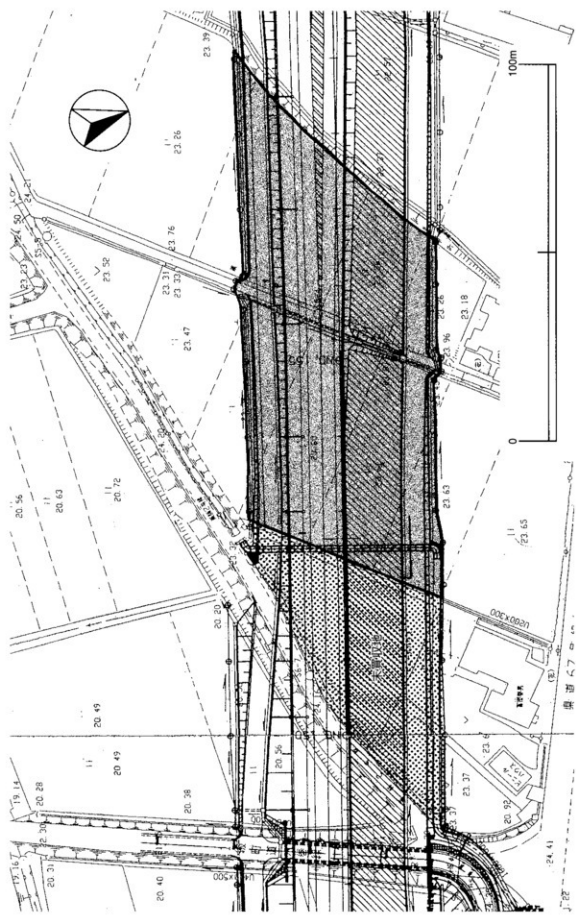
遺構は縄文時代の土坑、平安時代の溝跡、遺物は縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、などが出土するものと予想される。



第135図 薬師遺跡位置図



第137図 業師遺跡確認調査結果図（遺構検出地点）



第139図 養師遺跡範囲図

菜師遺跡
土坑断面（南から）



菜師遺跡
縄文土器出土状況
（南から）



菜師遺跡
須恵器片出土状況
（南から）



(8) 県営ほ場整備事業（土崎小荒川地区）

①中屋敷Ⅱ遺跡

1 遺跡所在地	仙北郡千畑町土崎字中屋敷180-1外
2 確認調査期間	平成14年11月18日～12月6日
3 確認調査対象面積	27,000㎡
4 工事区域内遺跡面積	22,000㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

本遺跡は奥羽山脈西麓の真昼川と釜淵川が作る合成扇状地の端に位置する。この扇状地は千畑町黒沢と一丈木付近の2箇所を中心として南は小荒川付近まで伸びる。遺跡の位置する地点はこの扇状地南端に近く、標高は48～51mである。扇状地端に位置することから遺跡周辺には湧水池が点在し、遺跡内も含めて南北500mの範囲内に4箇所の湧水がある（第140図△印）。周辺の遺跡としては本遺跡の南西1km、釜淵川沿いに縄文時代中期の内村遺跡、東北東2.5kmの扇頂部近くに同じく縄文時代中期の一丈木遺跡がある。このほか、遺跡内南側に所在する諏訪神社境内に板碑1基がある。

b 現況

水田・畑地

6 確認調査の方法

対象区域には33面の水田がある。調査では基本的にこの各水田面の西端にトレンチを設定し（A～Y、S、V、A'、B'、C'、D'）、重機による掘削の後人力での精査を行い、各トレンチ10mごとの基本層位の記録と検出された遺構プランの記録、出土遺物の採取を行ってその地点を記録した。また、扇状地基盤は砂礫層である。砂礫層上面の等高線図を作成するために各トレンチ内で10m間隔にボーリング棒による砂礫層の確認を行い、その高さを計測した。なお、対象区域については大正年間の公図が残されており、この公図と砂礫層上面の等高線図を参照することによって、水田造成以前の自然地形をある程度復元することが可能と考え、公図と現況図を実際に照合する作業も現地で行った。

7 確認調査結果

a 層序

I層 水田耕作土。黒褐色を呈するシルト質土である。近世以降現代までの遺物を包含する。

II層 黒褐色土。水田耕作土下に沈殿した鉄分の影響により赤褐色化する部分を含む。また、耕作により径3～5cmの礫を多く含む。縄文時代～中世の遺物包含層。

III層 青灰色粘質土。全域に確認される層ではなく、次のIV層が沈み込んだ部分に堆積する。上面で縄文時代～中世の遺構プランを確認。

IV層 砂礫層。径1～5cmの礫とその間を埋める砂とによってなる。扇状地を構成する基盤層であるが、扇状地形成後の小河川開析等により上面の高さは一様ではなく起伏に富む。上面で縄文時代～中世の遺構プランを確認。なお、内村遺跡での大木9式期の遺構面はこの砂礫層に比定され、また今年度調査の中屋敷Ⅱ遺跡（今回対象区の南西側）の大木8b式期の遺構面もこの砂礫層上面である。したがって中期中葉以前の遺構・遺物はこのIV層中およびその下位層に包含されると予想される。

b 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は総数240基に及ぶ。内訳は竪穴住居跡3軒、土坑48基、溝跡66条（暗渠と思われるものを含む）、柱穴102基、不整形プランの遺構（SX）17基、旧流路4条である。このうち、時期もしくは性格が明らかなものとして、対象範囲の西端で確認した縄文時代後期終末～晩期の土坑墓群や、北東端で確認した縄文時代中期の竪穴住居跡、同じく北東端で確認した墨書土師器（「寺」か？）を出土した土坑、さらに南東部で確認した中世陶器を納めた遺構などがある。このほか、北側では旧流路跡から多量のトチおよびクルミが縄文時代晩期の土器・石器を伴って出土し、当該時期の水さらし場遺構の存在が予想される。また、対象区中央で多くの柱穴群が見つかったが、この区域では珠洲系掘鉢を含む中世陶器が出土しており、これら柱穴群が建物跡を構成する可能性がある。

出土遺物は縄文時代中期後葉の大木10式期から近代までの各時期のものが出土している。出土遺物のうち最も量の多いのは縄文時代後期終末～晩期の土器・石器である。当該時期の土器は瘤付土器および大洞BC式から大洞A'式まで出土しているが、最も出土量の多かったのは対象区西端の当該時期の墓域を確認した区域である。既には場整備工事の完了している対象区の西側でも昨年の確認調査で後期終末～晩期の遺物が相当量出土しており、この西側部分から今年度対象区西側にかけてが当該時期の遺構分布の中心域と見られる。

8 所見

a 遺跡の種類

検出した遺構と遺物から、遺跡は縄文時代中期、縄文時代後期終末～晩期、古代、中世各時期に及ぶ複合遺跡であると言えるが、各時期の遺構・遺物の分布および立地には若干の差異が認められる。

まず、縄文時代中期の遺構であるが、調査区北東端で確認した竪穴住居跡1軒は、その確認面である砂礫層が対象区内では最も高い標高50mの地点に立地している。今回の確認調査ではこの地点以外に中期の遺構・遺物を検出した箇所はない。したがって、遺構・遺物の分布の中心、すなわち当該時期の居住域の中心はこの地点よりも東側のより標高の高い部分に中心をもつと予想される。

縄文時代後期終末～晩期の遺構のうち墓域を構成する土坑群は、前述したように対象区の西側の砂礫層の標高が47.5～48m前後の部分に中心をもつ。この部分の砂礫層上面の地形は対象区の北東端から伸びる高位部分が西側へ張り出すところにあたり、南北両側よりも幾分高い微高地となる。すなわち、土坑墓群はこの微高地に立地するが、当該時期の遺物は南北のより低い部分にも存在することが、対象区北側で予想された水さらし場遺構等によっても示されている。

古代は土師器および須臾器を検出した地点及び若干の遺構によって、遺跡の存在を示すことができるが、面的な広がりや確かめることはできなかった。前述した墨書土師器を出土した地点が対象区内の湧水池近くにあることを考えれば、水辺で執り行われた祭祀遺構とすることが可能かも知れない。

対象区の中央、砂礫層上面の標高が48～49mの部分は等高線間隔も広く比較的平坦な箇所である。多くの柱穴群が中世陶器を伴って検出されており、当該時期の居住域が営まれたことが予想される。

b 遺跡の範囲と工事区域

対象区の北西端若干と南東端および東側湧水池南側部分が遺跡範囲から除外される。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

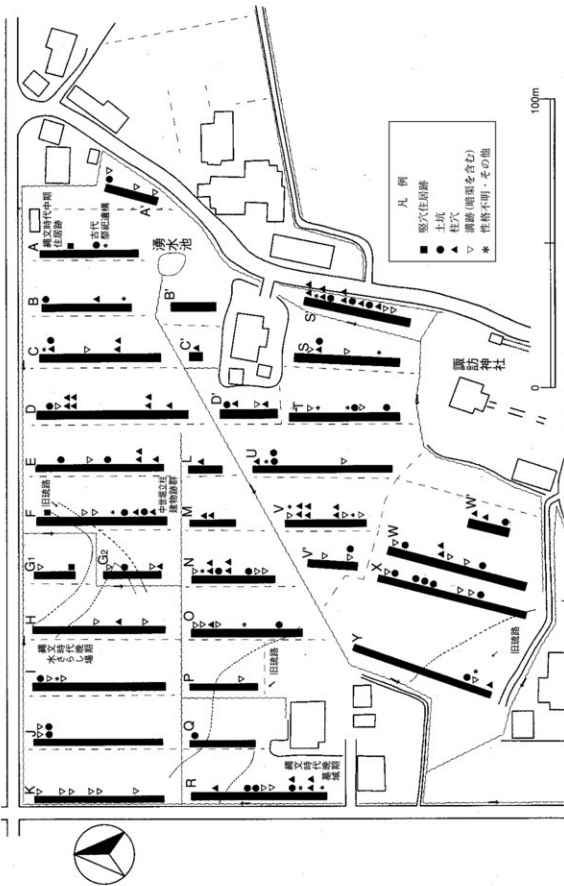
上記aの各時期の遺構・遺物の検出が予想される。



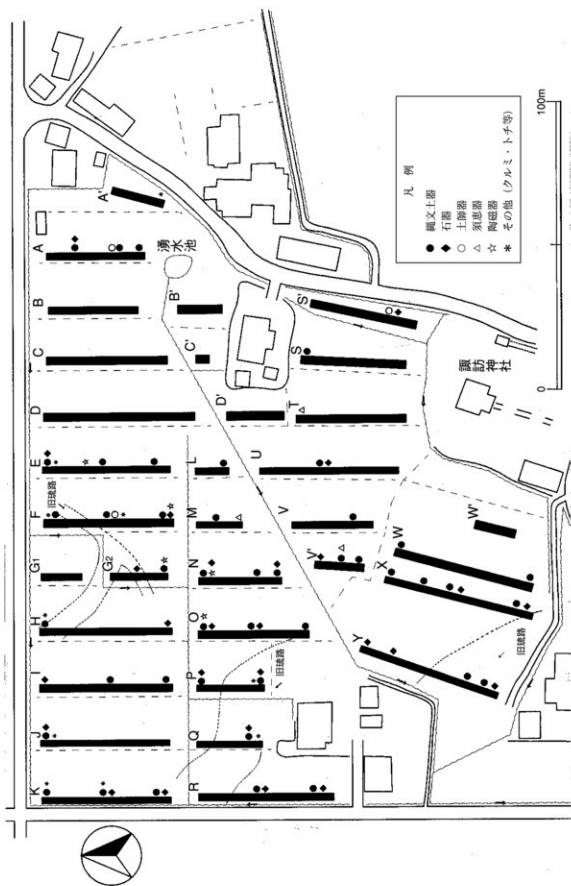
第140図 中屋敷Ⅱ遺跡位置図



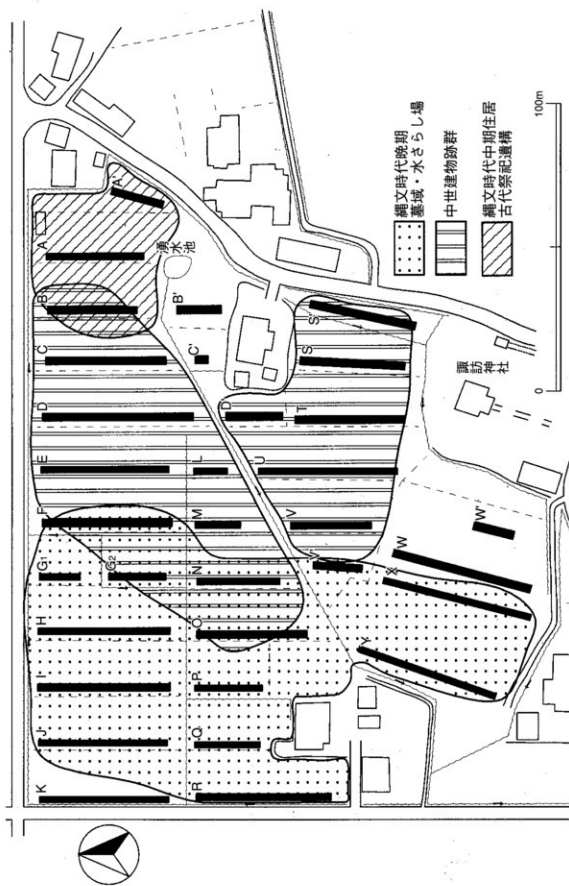
第141図 中屋敷II遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第142図 中屋敷Ⅱ遺跡確認調査結果図(遺構検出地点)



第143図 中屋敷Ⅱ遺跡確認調査結果図(遺物出土地点)



第144図 中屋敷Ⅱ遺跡範囲図

中屋敷Ⅱ遺跡
近景（北西から）



中屋敷Ⅱ遺跡
Fトレンチ内土坑
（剝片・クルミ出土）
半截状況（西から）



中屋敷Ⅱ遺跡
Tトレンチ
陶器出土状況（北から）



(9) 県営ほ場整備事業（館合地区）

①^{おおみない}大見内遺跡・^{たての}館野遺跡

1 遺跡所在地	平鹿郡雄物川町薄井字大見内500外
2 確認調査期間	平成14年11月25日～12月12日
3 確認調査対象面積	270,000㎡
4 工事区域内遺跡面積	270,000㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

平鹿郡雄物川町は、南北約60km、東西約15kmにおよぶ横手盆地の南西部にあり、北は大森町・大雄村、東は平鹿町、南は十文字町・羽後町、西は東由利町と接する。町のほぼ中央部を、奥羽山系に源を発する雄物川が土地を東西に二分するように北流している。雄物川の東部は平坦肥沃な水田地帯、西部は出羽山地の一角を占める山麓地帯となっている。また雄物川の右岸沿いに主要地方道湯沢雄物川大曲線が通じ、町の南部を東西に平鹿郡と由利郡を結ぶ国道107号が通じている。

大見内・館野遺跡は雄物川町の北東部に位置し、雄物川から東へ約2.1kmの沖積地（標高約44m）に立地している。遺跡および周辺は、明治～昭和にかけて区画変更に伴う耕地整理が行われている。

b 現況

大見内遺跡の調査区の大部分は水田であるが、一部は休耕地や畑地となっている。館野遺跡の調査区南端は一部畑地で、以外は水田である。また、両遺跡には農道と用排水路が南北に走っている。

6 確認調査の方法

今回の確認調査は調査期間に対して面積が広いため、分布調査において遺構・遺物が確認された地区を除いて行うこととした。したがって確認調査対象面積に対する総試掘面積は、他の確認調査と異なり大幅に少なく、0.9%となった。確認調査対象地区に幅2m・長さ3～20mのトレンチを南北方向に73本、東西方向に14本の計87本設定し、重機や人力で耕作土（表土）を除去した後、遺構と遺物の有無を確認しながら地山面まで掘り下げを行った。確認した遺構等は、縮尺100分の1で実測して記録した。大見内遺跡のトレンチの試掘面積は1,415㎡で、館野遺跡のトレンチの試掘面積は946㎡であり両遺跡のトレンチの総試掘面積は2,361㎡となり、確認調査対象面積の0.9%である。

7 確認調査の結果

a 層序

大見内遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下の通りに分層した。

第Ⅰ層 黒褐色土（10YR 2/3）：耕作土（表土）、層厚10～18cm。

第Ⅱ層 黒褐色土（10YR 2/2）：遺物包含層、層厚6～11cm。

第Ⅲ層 黒色土（10YR 2/1）：遺物包含層、腐植土となっている部分がある。
層厚6～30cm。

第Ⅳ層 基本的に粘質状の地山（にぶい黄褐色土 10YR 5/3）であるが、東部では砂礫混じりの層となっている箇所が認められた。本確認調査における遺構確認面である。

館野遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下の通りに分層した。

第Ⅰ層 黒褐色土（10YR 3/2）：耕作土（表土）、層厚12～18cm。

第Ⅱ層 黒褐色土（10YR 2/2）：遺物包含層、層厚6～12cm。

第Ⅲ層 黒色土（10YR 2/1）：遺物包含層、部分的に腐植土となっている部分がある。
層厚9～13cm。

第Ⅳ層 ぶい黄褐色土（10YR 5/3）および灰色土（10Y 5/1）の粘質状の地山であり、本確認調査における遺構確認面である。

b 検出遺構と出土遺物

大見内遺跡で確認できた遺構は、竪穴住居跡が5軒、土坑20基、河川跡4条、溝跡3条、性格不明遺構11基、柱穴様ピット61基の計104遺構である。調査区北部の東側では遺構は検出されなかった。館野遺跡で確認できた遺構は、土坑13基、溝跡10条、性格不明遺構5基、柱穴様ピット111基の計139遺構である。両遺跡で確認できた遺構総数は、竪穴住居跡が5軒、土坑33基、河川跡4条、溝跡13条、性格不明遺構16基、柱穴様ピット172基の計243遺構である。

大見内遺跡で出土した遺物は、主に平安時代の土師器・須恵器（墨書土器8点含む）、木製品（箸等）で、他に縄文土器、中世以降の陶磁器などである。その出土量は、中コンテナ（54cm×34cm×10cm規格）で8箱分である。館野遺跡で出土した遺物は、平安時代の土師器・須恵器で、他に縄文土器、時期不明の木片などである。その出土量は中コンテナ（54cm×34cm×10cm規格）で3箱分である。

8 所見

a 遺跡の種類

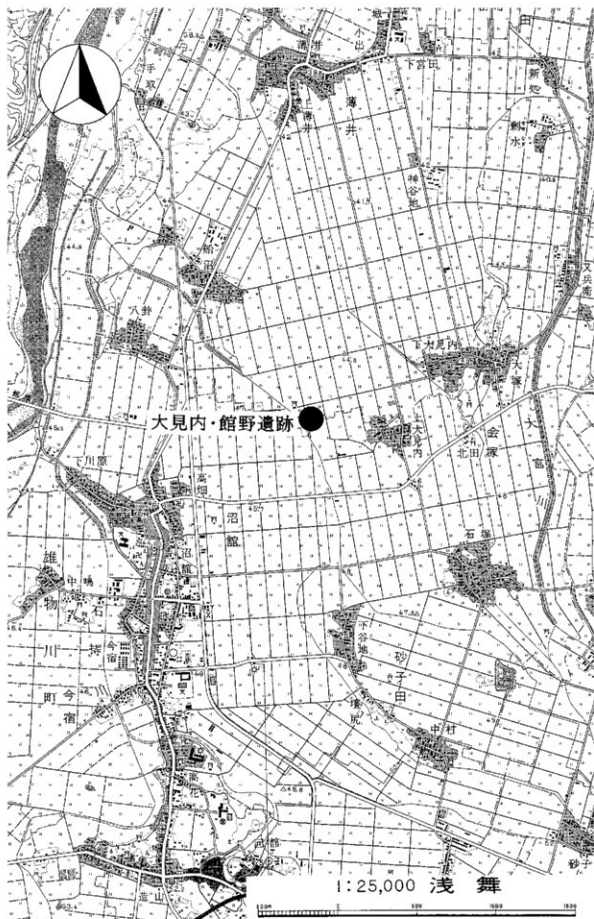
大見内遺跡・館野遺跡は、縄文時代と平安時代の複合遺跡であり、主に平安時代の集落跡と考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

調査対象範囲の270,000㎡は全て遺跡内であり、遺跡の範囲は調査区外の東西南北に広がることが想定される。しかし正確な面積は不明である。したがって、調査対象範囲が全て工事区域となるが、今後の工程等の検討により、壊される恐れのある部分が発掘調査の対象となる。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

両遺跡とも遺構は、主に平安時代の竪穴住居跡、土坑、河川跡などで、遺物は縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・木製品などが出土するものと予想される。



第145図 大見内遺跡・館野遺跡位置図



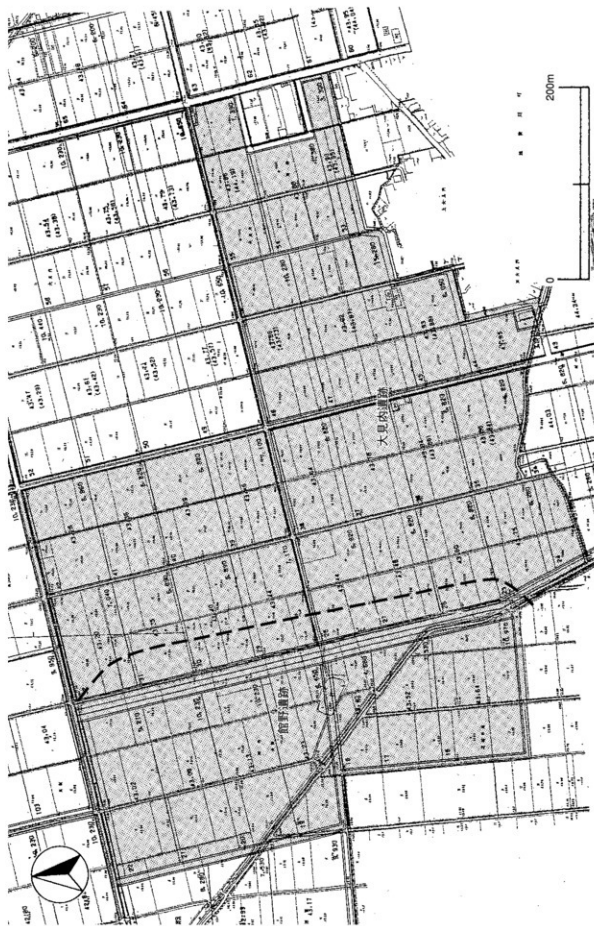
第146図 大見内遺跡・館野遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第147図 大見内遺跡・館野遺跡確認調査結果図（遺構検出地点）



第148図 大見内遺跡・館野遺跡確認調査結果図(遺物出土地点)



第149図 大見内通・館野通範囲図

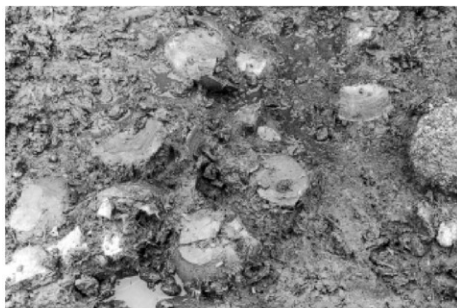
大見内遺跡
トレンチ調査状況
(北から)



大見内遺跡
遺構プラン検出状況
(北から)



大見内遺跡
遺物出土状況
(西から)





館野遺跡
トレンチ調査状況
(北から)



館野遺跡
遺構プラン検出状況
(北から)



館野遺跡
木製品出土状況
(南から)

(10) 県営ほ場整備事業（中仙南部地区）

①小鳥田^{こちょうだ}1遺跡

1 遺跡所在地	仙北郡中仙町鐘見内字水上216-1外
2 確認調査期間	平成14年11月21日～12月20日
3 確認調査対象面積	18,000㎡
4 工事区域内遺跡面積	3,700㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

小鳥田1遺跡は、JR田沢湖線羽後長野駅の南、約2.5kmに所在する。本遺跡は、奥羽山脈を源流とする齊内川によって形成された扇状地の先端部にある。

b 現況

調査対象区は、水田である。周囲の水田は、扇状地の先端部に当たるため、いたるところ湧水が著しい。

6 確認調査の方法

確認調査対象地区に幅2m・長さ任意のトレンチを北東～南西方向に24本、その一部に直交させた7本の計31本設定した。重機で耕作土および盛土を除去した後、人力で遺構と遺物の有無を確認しながら地山面まで掘り下げを行った。確認した遺構等は、縮尺100分の1で実測して記録した。

試掘面積は1,600㎡で、確認調査対象面積の8.9%にあたり、トレンチの総延長は800mである。

7 確認調査結果

a 層序

調査対象域は南北に細長いため、層序は場所によって違いがある。また、地山面は今回の調査対象範囲の西縁を北から南に流れる北川に近づくにつれて低くなる。

C1トレンチの基本層序は以下の通りである。

- I層 暗褐色土 耕作土。層厚15～30cm
- II層 黄褐色土 場所によってはII層は認められない。
- III層 緑灰色土 地山土。粘性の強いグライ化土。

E4トレンチの基本層序は以下の通りである。

- I層 にぶい黄褐色土 耕作土。層厚10～15cm
- II層 暗褐色土 層厚10～20cm
- III層 にぶい黄橙色土 地山土。

I・II層が遺物包含層であり、遺構確認面はIII層上面である。

b 検出遺構と出土遺物

確認できた遺構は、覆土に炭化物を含む土坑、柱穴群、溝跡等である。遺物は、平安時代の土師器や須恵器が出土した。

8 所見

a 遺跡の種類

平安時代の集落跡であると考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

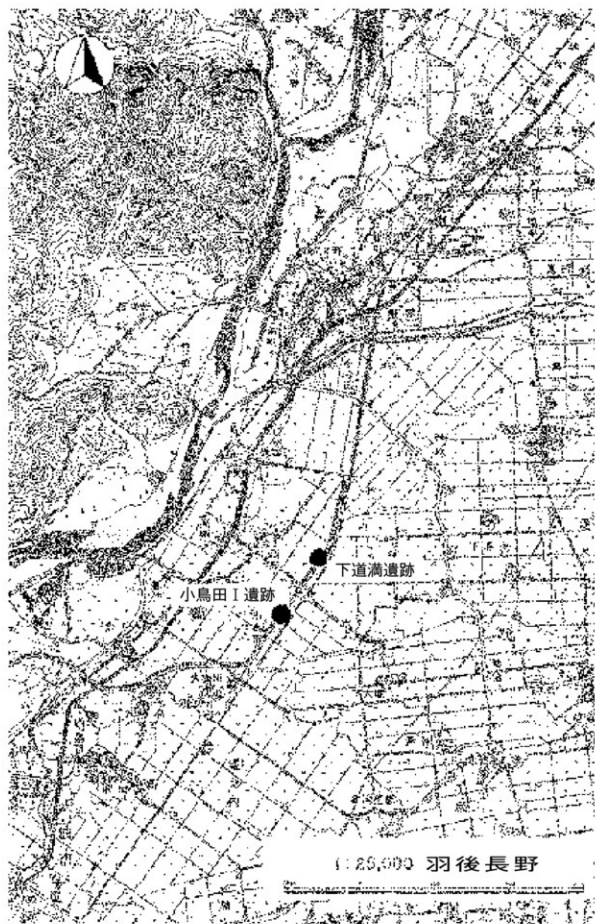
工事区域内の要調査面積は3,700㎡である。

調査区内では微高地状に残る部分に遺構が拡がっていると考えられる。遺構は（D2、E4トレンチ付近）に集中し、遺物もこの付近から密に出土している。

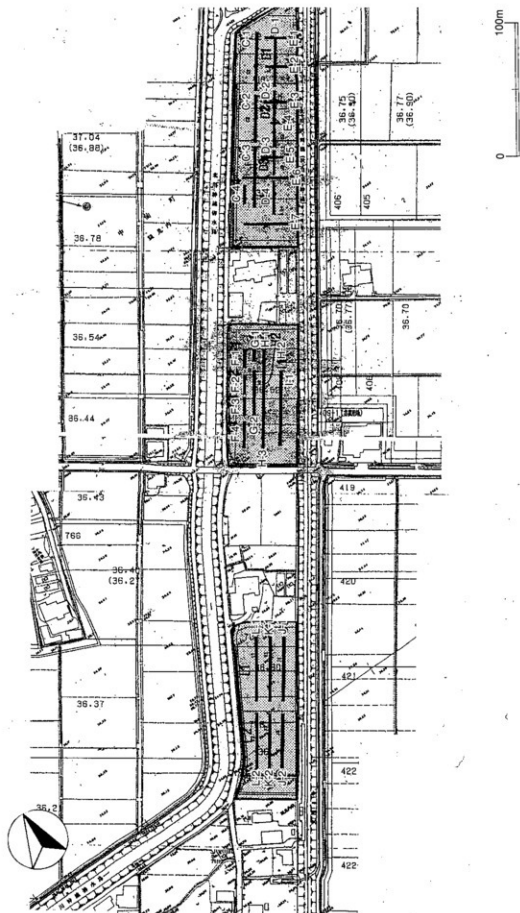
c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

遺構は土坑・柱穴・溝跡等を中心に検出されると予想される。

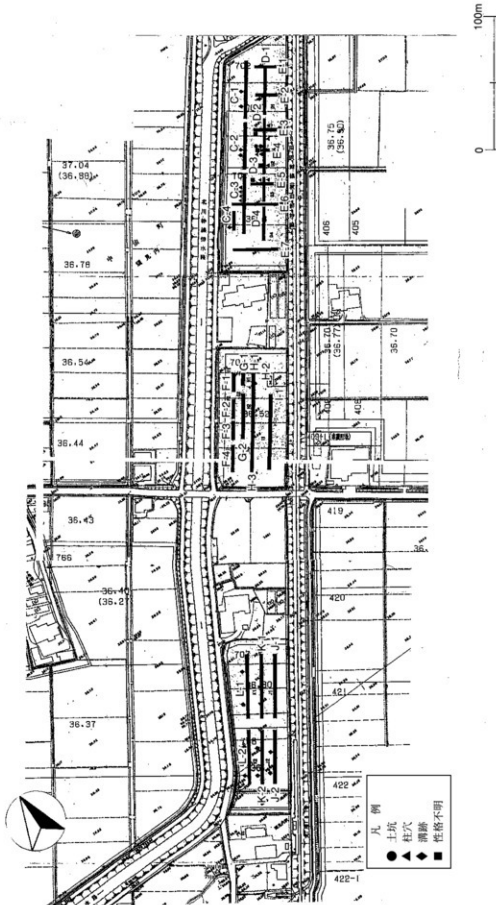
遺物は主に平安時代の土師器・須恵器の出土が予想される。



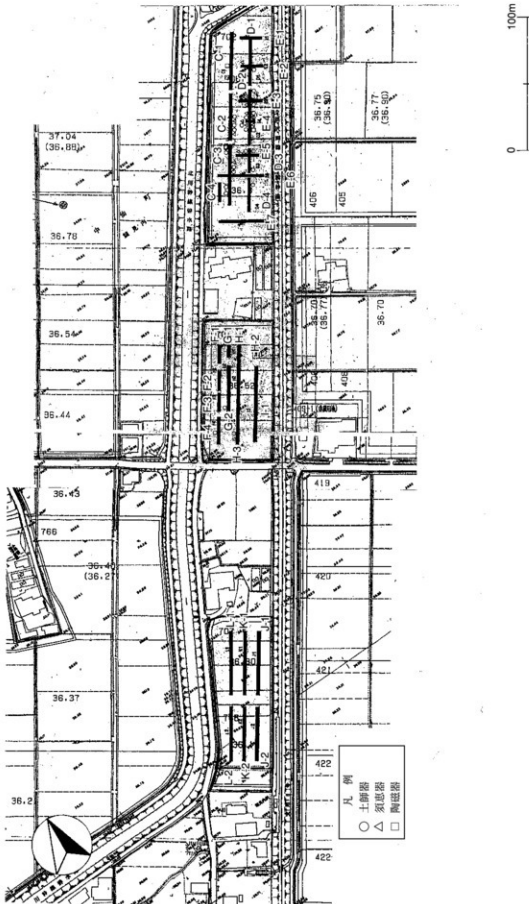
第150図 小鳥田 I 遺跡・下道満遺跡位置図



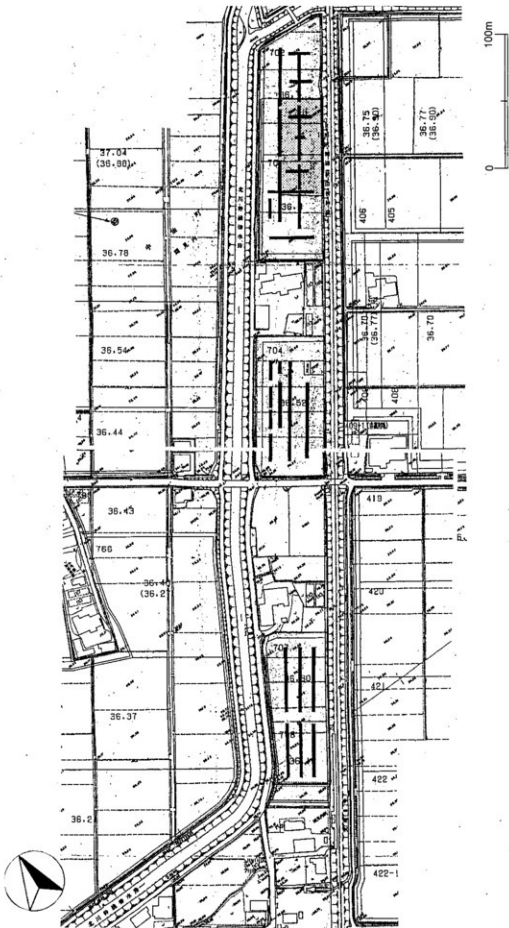
第151図 小鳥田I遺跡確認調査地帯とトレンチ位置図



第152図 小鳥田Ⅰ遺跡確認調査結果図(遺構検出地点)



第153図 小島田 I 遺跡確認調査結果図 (遺物出土地点)



第154図 小島田 I 遺跡範囲図



小島田Ⅰ遺跡
作業風景



小島田Ⅰ遺跡
遺構検出状況（北から）



小島田Ⅰ遺跡
遺物出土状況

しもどうまん
②下道満遺跡

1 遺跡所在地	仙北郡中仙町清水字下道満22-1外
2 確認調査期間	平成14年11月21日～12月20日
3 確認調査対象面積	22,000㎡
4 工事区域内遺跡面積	0㎡
5 遺跡の立地と現況	

a 立地

下道満遺跡は、JR田沢湖線羽後長野駅の南、約2.0kmに所在する。本遺跡は、奥羽山脈を源流とする齊内川によって形成された扇状地の先端部にある。

b 現況

調査対象区は、水田である。周囲の水田は、扇状地に当たるため、いたるところ湧水が著しい。

6 確認調査の方法

調査区内には北東-南西軸方向に幅2mのトレンチと一部そのトレンチに直交するトレンチ合計10本設定した。重機による掘削の後、手作業による遺構確認作業を行った。

試掘面積は1,800㎡で確認調査対象面積の約8.2%にあたり、トレンチの総延長は800mである。

7 確認調査結果

a 層序

P1トレンチの基本層序は、以下の通りである。

I層 暗褐色土 しまり・粘性ともに弱

II層 オリーブ褐色土

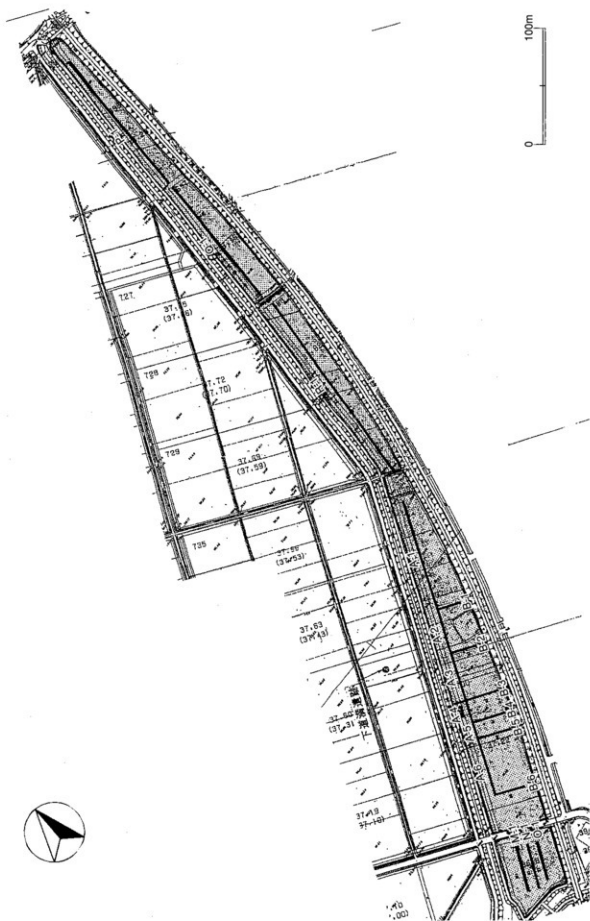
III層 黄褐色土 地山土・木根による攪乱あり

b 検出遺構と出土遺物

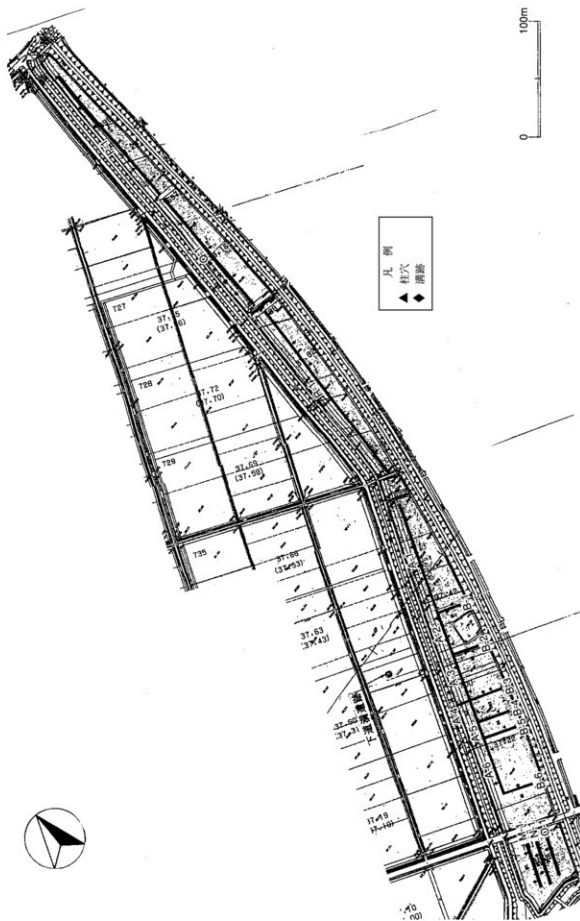
調査区の水田は、耕地整理と河川改修を受けていた。耕作土の下は30cm程の盛土と流木、木片等を含む1m程の堆積土となっており、明確な遺構を検出することができなかった。遺物は極めて少量出土したが、耕地整理による流れ込みと考えられる。

8 所見

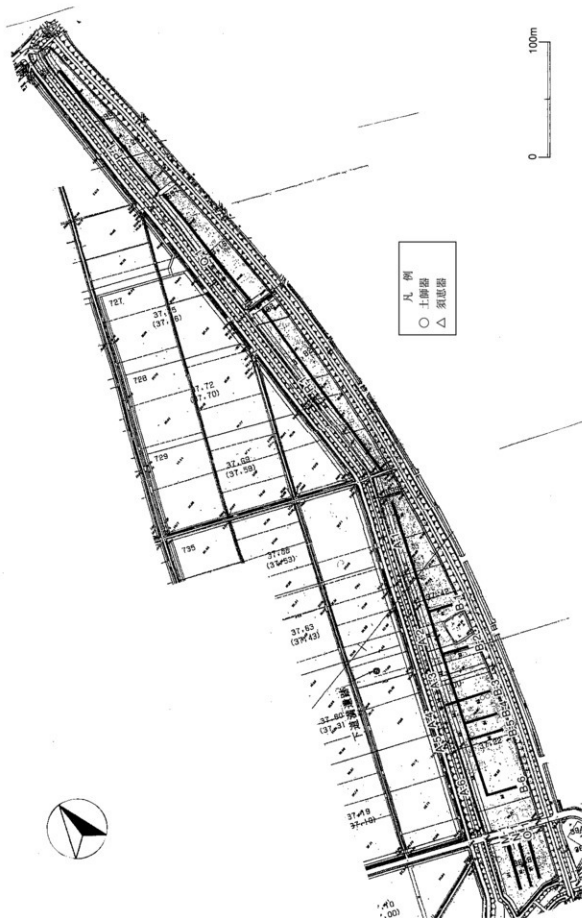
今回の調査で耕地整理の際に地山まで攪乱を受けていること、河川などの影響を受けたものと考えられる。工事区域内での発掘調査の必要性は無いものと考えられる。



第155図 下道満路踏確認調査範囲とトレンチ位置図



第156図 下道溝遺跡確認調査結果図（遺構検出地点）



下道溝遺跡
全景（南から）



下道溝遺跡
作業風景（西から）



下道溝遺跡
出土した須恵器



秋田県文化財調査報告書第365集

遺跡詳細分布調査報告書

印刷・発行 平成15年3月

編集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町弘田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331 FAX (0187)69-3330

発行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号

電話 (018)860-5193

印刷 株式会社 ウェーブ

シンボルマークは、北秋田郡森吉町（白坂）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

遺跡詳細分布調査報告書

2003・3

秋田県教育委員会

